

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391000023		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム金山(南棟)		
所在地	岩手県陸前高田市竹駒町字相川73-30		
自己評価作成日	令和3年9月17日	評価結果市町村受理日	令和3年12月3日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム金山は、元はグループホームつばきとグループホームりんごが竹駒町で休止中だった施設(グループホーム金山・グループホーム竹の里)に、平成30年9月1日に引っ越し、2ユニットとして再開した施設である。介護老人保健施設松原苑、松原クリニック等とは距離的には離れてしまったが、法人としても入居者の状態変化、急変、災害時には各事業所への応援要請、連携を行い速やかに対応できる体制は継続されている。医療面では松原クリニックや訪問看護と連携し、看取りが可能な体制となっている。また、コロナウイルス感染のバックアップ体制も出来ている。老健と団体に職員は委員会活動しており、可能な限りいろいろな情報が入手でき、勉強会にも参加している。陸前高田の在宅医療を支える会等、外部の研修機会もコロナウイルス流行前は参加していた。月1回以上は季節に合ったイベント行事を開催している。閉じこもり予防や季節を感じられるように、頻回にドライブ等の外出(感染予防の為に外部との接触は避けて)をしている。庭には家庭菜園があり、そこで採れた新鮮な野菜を提供している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

運営母体は、隣市大船渡施設と当市の高田施設の2体制で、クリニック、老健施設、グループホーム、小規模多機能ホーム、訪問看護ステーション等を運営する医療法人である。当事業所は、2ユニットで3年前に再開し、小規模規模多機能ホームが隣接している。敷地内には、現在廃止中のデイサービスセンターもある。法人内の医療、介護の各施設、在宅支援の連携体制が整っており、利用者の状態に応じた対応ができ、ホームでの看取りも可能で、利用者、家族の安心感、信頼感を得ている。利用者18名の介護度は平均2以下で車イス使用者もいない。職員は、理念に掲げる「その人らしさを再輝させる」の実践に努めており、利用者は、全員でドライブを楽しみ、わらじづくりの趣味を生かす人や料理作りに積極的に協力する人など、自分の得意分野を活かして生き生きと日々を過ごしている。地域との連携の基盤もできており、アフターコロナの地域交流の再開が期待される。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年10月22日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「入居者の感情・行動を受け入れ、職員が気づき、その人らしさを再輝させる」を理念にしている。ホーム内に掲示している。	再開前からの理念である「利用者一人一人の思い、行動を受容し、その人らしさを再輝させる」を実践するため、生活歴、好き嫌い、趣味等から、本人の希望に沿った活動を各人のケアプランに位置付けて支援を行い、理念の実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	以前は地域住民を招いて催し物をしていましたが、コロナウィルスの影響で、招待する事をしていない。しかし、以前通っていた床屋等の馴染みの関りは維持している。また、面会制限はしているが、利用者の生活と切り離せない関係性の人は面会を許可している。	休止期間も入れ15年の歴史があり、震災の年に開設した隣接の小規模多機能ホームも含め、地域に馴染んだ生活を送っており、交流は定着している。コロナ発生前は、地域の行事に参加したり、地元小学校や保育園との交流、ホームの夏祭りへの地域の皆さんの招待等、交流を活発に行っていたが、現在は自粛している。法人では、各地域に設置する介護施設に「地域の何でも相談室」を置くようにしており、当ホームと隣接の小規模多機能ホームもその機能を担い、地域の相談窓口になっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の報告書でホームでの取り組みや認知症の方の日常生活、認知症ケア等について報告している。また、グループホーム金山・小規模多機能ホーム玉山共に地域の何でも相談所という役割を持っていると地域に発信しており、相談も受けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催予定していたが、コロナウィルス感染症予防の観点から、書類を通しての報告としている。運営推進委員とは文書での意見集約を行い、活用している。	会議は、奇数月に南北2ユニット、小規模多機能ホームによる合同開催としているが、今年度は開催出来ず、書面会議とし委員の意向を照会している。委員からは、「感染予防対策を万全に、大雨、台風に備えて」といった回答がある。ホームの敷地が土砂災害区域にかかっているが、過去の災害の歴史を委員から教示いただいている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の報告書を市の担当者に提出している。市のケアマネ会議に参加し、情報交換を行っている。コロナウィルス流行前は陸前高田の在宅療養を支える会の中の劇団にも参加し、地域への医療・保健・福祉の啓蒙にも協力している。	市の担当者とは、電話や直接出向いて相談するなど、円滑に連携している。家族との関係が難しいケースについて、担当者と協議、連携しながら、対応した事例がある。現在は休止しているが、管理者は、医療機関や介護施設の専門職で構成する「在宅療養を支える会」(市が事務局)の劇団による啓発活動の中心として活躍している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。日中は施錠せず、夜間は防犯のためにしている。不穏状態等のリスクがありそうな時は職員間で朝礼やスタッフミーティング等で情報共有し、拘束なく過ごせる様に努めている。夜間にセンサーを使用する事があるが、あくまで見守りをスムーズに行う為であり、行動制限は一切していない。	法人運営の市内の老健、クリニック、グループホーム、小規模多機能ホーム等(「高田施設」と総称)で構成する「身体拘束適正化委員会」で身体拘束に対する各園の対応を協議するとともに、年数回の研修会を実施している。また、「委員会広報」を発行し、職員の意識啓発を行っている。事業所では、「身体拘束廃止宣言」を行い、身体拘束や行動制限のないケアを実践している。家族の了解を得て、5名が安全のためベッドセンサーを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高田施設でも定期的に研修を受けられる体制である。身体的、精神的、金銭的(家族に関わる)虐待にも注意している。また、所長は社会福祉士の資格を保有し、高齢者虐待防止法の知識がある。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	高田施設でも定期的に研修を受けられる体制である。また、所長は社会福祉士の資格を保有し、必要に応じ制度の職員への勉強会を開ける環境下にある。コロナウィルスが終息すれば、必要に応じて、外部研修に参加させていく予定。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に感染予防に配慮しながら、なるべくホーム内の生活の様子を見学してもらう。申し込み相談や見学希望も増えている。契約時には十分な説明を行い、合わせてリスク説明も行っている。入居者、家族が納得した後で契約をしている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的に入居者の話を傾聴し、希望や不満がないかを理解する様に努めている。家族が面会時には日々様子を説明したり、毎月請求書と共に書面としても様子を伝えている。また、高田施設としても定期的に家族全員を対象としたアンケートを行っている等、要望を聞き入れる体制を構築している。	利用者からは、外出やドライブの希望が多く、コロナ禍の中でも、ドライブの回数を増やしている。家族には、毎月の行事等の広報に加え、居室担当者から、利用者の暮らし振りについて、写真を添えた「お便り」の形で連絡表を送付している。法人(高田施設)全体で定期的に「家族アンケート」を行い、運営や職員の接遇等の満足度や要望等について確認しているが、これまでのところ、園に対する要望等は特にない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のスタッフミーティングや連絡ノートを活用し、随時、意見や提案が出来る体制を作っている。日常業務の中からも職員の意見を汲み取る様な環境作りに努めている。	日常業務に加え、毎月のスタッフミーティング、人事評価での個人面談、ケアプランに関するカンファレンス会議等が職員の意見や要望を聴取する機会になっている。職員からは、パートの効果的な応援による利用者との対話時間の捻出、献立の充実と食材費予算との関係、電話の受け方等の接遇改善など、積極的に意見が出され、運営に活かされている。高田施設の幹部(介護部長、看護部長)と職員は話しやすい関係ができています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	随時、統括部長・看護部長・介護部長に相談しており、職場環境を理解してもらっている。隣接している小規模多機能ホーム玉山の所長は介護部長であり、要望を伝えやすい環境下である。年2回人事考課を行い、個々の評価・意見集約を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在はコロナウイルス感染予防の為に法人外の研修は最小限にしている。法人内研修は定期的で開催されており、参加希望の職員やこちら側で必要だと判断した研修には勤務調整して参加できるようにしている。月1回のスタッフミーティングの際に事業所内の勉強会も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウィルスの影響で機会は減ったが、流行前は県、ブロック定例会や各研修等に参加していた。その際に他ホームの職員との意見交換等を通し、情報収集の場を設けサービスの向上につなげている。現在は陸前高田の在宅療養を支える会の研修に参加し、交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設利用経験や担当居宅ケアマネがいれば事前に情報を収集しておく。その後、入居前に訪問したり、ホームに見学して頂き、不安に思っている事や要望等を傾聴し、安心して利用できるように対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅での介護経験を聞き入れ、家族の不安・要望に傾聴し対応している。アセスメントを通じ、具体的なケア内容を提案する事もある。サービス開始後も毎月連絡表を送っている。面会の機会があれば本人の状況を報告、要望を傾聴し対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況に応じて適切なサービスを検討し、本人・家族に説明し、承諾を得た段階で他施設の相談員と連携を取っている。所長は在宅ケアマネジャーの経験があり、必要に応じて他のサービス利用を含めた対応を協議している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	アセスメントをから、今までの生活歴、趣味を活かせるように場面に応じ、食事・おやつ作り、畑作業等を積極的に行って頂いている。入居者と職員間で教え合い、意向を尊重した姿勢で関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人が過ごしやすい生活を送れるように協力を働きかけている。毎月、ホームでの生活の様子、健康状態、お小遣いの残高をお便りで報告している。体調の変化についても随時、報告と相談をしている。家族に、こちらから生活における相談や受診等の援助を求めた際、スピーディーに対応してくれている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外部との接触は最小限にはしているが、以前通っていた床屋等の馴染みの関係は維持している。また、面会制限はしているが、利用者の生活と切り離せない関係性の人は健康状態の確認の上、面会を許可している。リモート面会は可能な体制である。	友人、知人、中には震災のボランティアで知り合った人などの来訪は、コロナ感染予防のため、原則止めてもらっている。利用者の買物も休止している。ユニット毎にマイクロで週1回は全員がドライブに出掛け、馴染みの海岸、港、復興工事で一変した街並みを見てもらっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常生活の生活の中でも、利用者同士の関係性を把握し、様々な作業やレクリエーション行って頂いている。若い頃に同じ職場、出身地域だった等の関係性を活かし、話題を提供している。北南棟の行き来もある等、ホーム内の環境にも配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設に入所・入院した利用者・家族の情報収集は行っており、その後の相談される事がある。亡くなった場合には管理者が家族の状況を収集し、必要に応じてメンタルケアや葬儀参列等のフォローをしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族からの情報や日常の会話の中で本人の希望や考えを把握する様に努めている。特に昔の話をきっかけにニーズを探る。希望に合うような活動の援助をし、出来るだけ意向に添う様に心掛けている。	殆どの利用者が自分の思いや希望を意思表示でき、皆でお茶や牛乳を飲みながら談笑する時間の昔語りの中から、本人の思いや希望を引き出すこともある。花の好きな利用者に家族から花を持ってきてもらい、生け花をお願いするなど、本人の希望に沿った支援を行っている。介護度3の利用者が「わらじつくり」をやっていたことが分かり、取り組みを勧めたところ日課となって、周りにも拡がり、今は何人かの利用者が楽しみながらわらじをつくっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴や馴染みの暮らし方や生活環境等を日常の会話やご家族から傾聴することで利用者のこれまでの暮らしの把握に努めている。在宅時の担当ケアマネがいれば、第三者の目からの意見を聞いたり、書面での情報収集をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの1日の過ごし方を見守ったり見極めたりすることで、心身の状態変化にすぐ対応できるよう努めている。職員間の申し送りの体制も出来ており、隙間なくケアを努めている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当職員がアセスメントに基づき介護計画を作成している。もちろんその過程には計画作成担当者、管理者、他職員、リハビリテーション等の専門職の意見も反映できる体制としている。家族からの要望を踏まえ職員間で確認し合い情報を共有している。また、状態変化時には随時計画の見直しを行っている。必要に応じ、医師や看護に相談することもある。	介護度2以下の利用者が多く、やりたいこと、やれることに取り組んでもらうことを第一にケアプランを作成している。家族の意向や法人運営のクリニック、訪問看護師等、専門職の助言・指導により、体重の増えた人への食事制限、心臓の悪い人への負担のかからない運動等、きめ細かく目標を決めている。毎月、居室担当者が中心となってモニタリングを行い、3ヵ月毎の評価カンファレンスに繋ぎ、ケアプランの評価、見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の利用者の様子をケース記録として残している。日々の様子の要点をまとめた申し送り表も活用している。利用者が発言した言葉や表情、行動から気づきや工夫をくみ取り介護計画の見直しに活かしている。健康管理や医療側(訪問看護)との関わりは健康管理記録票を活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に生まれるニーズに関しては必要の応じ家族に報告、相談する。状況に応じた支援を提供できるように他事業所との連携を図っている。特に医療面でのケア(主治医や訪問看護との連携)については、柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウィルス流行前は知人との関りを持ち、地域のお祭り等の見学にも行っていた。現在は地域との関りは減っているが、その代わりに、施設内での役割を重視している。知人と電話での関りや、希望があればリモート面会の設備もある。ハード面の震災復興の様子を感じてもらうために、ドライブを積極的に行っている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医をそのまま継続し受診して頂いている。希望があれば、松原クリニックに、切れ目がない様に変更している。家族が看取りを希望された時にも松原クリニックの協力に対応する体制は出来ている。家族が付き添う際には、本人の状態の報告や連絡が必要な際は書面にて伝達し関係を保っている。	利用開始前からの主治医に定期的に通院している利用者が半分、残りの人は、法人運営の松原クリニックを2か月に1回定期受診している。緊急時には往診にて対応している。通院は家族同行を基本とし、受診連絡票を持参してもらっている。法人運営の松原訪問看護ステーションの看護師が週1回来所し、一人一人の健康状態を観察し、適時に指示や助言を出してくれる。歯科治療は、運営法人の老健の訪問歯科を必要に応じて利用している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回訪問看護による健康チェックが行われており、状態の報告・相談を管理記録に記載して伝達している。それによって職員全員が共有できている。また、随時、体調の変化には関しては、訪問看護に相談し、看てもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院設備のある県立高田病院と県立大船渡病院では医療連携パスという様式を使用している。入院時には1週間以内に記入し病院に提出し、退院時に病院側よりもらう流れとなっている。入院中は面会可能であれば職員が病院を訪問し、医療側と情報共有出来る体制としている。元々、管理者が在宅ケアマネであり、退院時の流れもスムーズに出来る体制となっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の状態に変化が見られた際は、家族に今後の方針について説明を行う事としている。希望によっては松原苑や松原クリニックと連携していく体制となっている。事業所内においては、看取りに関するマニュアルを作成し各部署との連携を図りながらチームとして支援している。	重度化の対応については、運営法人内のクリニックや老健と連携できる体制が整えられていること、また、看取りについては、家族の希望によりホームでの対応も出来ることを、利用開始時、本人、家族に対して説明している。現在、看取りを必要とする利用者はいないが、今後備え、看取り経験のある職員が中心になり、経験のない職員へのターミナルケアの研修を充実させたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員はAED、心肺蘇生法の講習を受け、応急手当や初期対応の仕方を訓練している。AEDは同一敷地内にある小規模多機能ホーム玉山に設置してある。緊急時の対応マニュアル等を活用して職員間で再確認を行っている。		

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	西部地区施設として避難訓練を行うことで避難の方法を身につけている。又、法人としてはモバイル通信の配信があり、その指示に従って対応している。緊急時にはボタンを押すと回転灯により地域住民に知らせる体制となっている。「高齢者等避難」が出た際には旧GHつばきに避難する事になっている。	隣接の小規模多機能ホームと合同で春秋2回の火災避難訓練(うち1回は夜間想定)を実施している。また、グループホームの施設半分が市のハザードマップ上の土砂災害危険箇所になっていることから、休止中の旧グループホームを避難先にして、高齢者避難情報が出たことを想定した訓練を年1回実施している。避難訓練での地域協力は特にお願いしていない。隣接の小規模多機能ホームが市の「福祉避難所」に指定されており、市の防災倉庫も配置されている。防災グッズ等を常備しており、緊急時の赤色灯も設置している。	災害発生に向け、地域との協力体制の充実が望まれ、運営推進会議でテーマにしたい。現在、休止している敷地内の「旧デイサービス竹の里」の一層の地域開放が期待される。ホームの避難訓練においては、夜間時の状況について、実際に職員でシミュレーションを行い、課題を見つけることも望みたい。また、定例の避難訓練に加え、運動もかねて月1回程度の「ミニ避難訓練」の実施を検討することも期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声のトーン・目線・言葉遣いに配慮し、個人の尊厳を大切にしている。声を掛ける時は必ず目の前から、そして特に目線を同じにすることを重要と考え支援している。身体ケアの際には、状況により女性職員が対応する等、プライバシー保護を厳守している。	自分の思いや意思をきちんと話す利用者が多く、職員は、利用者の話を丁寧に受け止め、共感しながら会話をしたり対応をしており、特に入浴の際には、介助の仕方、異性介助の嫌な人への対応、皮膚疾患のある人への配慮等、尊厳やプライドを傷つけないよう留意しながら支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中でも利用者の思いや希望を傾聴し、気づけるよう努めている。変化があれば、職員間での情報共有を図り対応している。自己決定が出来る様に支援しつつ、難しい場合は選択肢の中から選んでもら得る様な対応を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先ではなく、入居者優先と考え一人ひとりのペースを大切に、入居者の訴えを傾聴し、可能な限り希望に沿った支援をしている。例えば毎日の夜間入浴を希望する人にはそうしてもらい、朝が苦手で朝食が遅くなりがちの人でも、急かさずにその人のペースに合わせている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々に合わせたおしゃれ、身だしなみにお化粧品道具を準備したりしている。衣類も一緒に選んだりして、本人の着たいものや季節感に合ったものを着て頂いている。コロナウィルスの流行前は家族から承諾を得て、入居者・職員と一緒に買い物に行き、好きな服を買って来た時もある。行事の際には皆で浴衣等を着て楽しんでもらっている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本人のできる作業を把握し、野菜の切り方、片付け等に参加される。定期的に得意なお菓子作りをして頂いている。会話の中から好みの食べ物を聞き出しメニューに入れる。チラシを見てもらい、希望を聞いてその日に購入・提供する事もある。誕生日には本人の好きなメニューを提供している。季節ものやお楽しみメニューも取り入れている。	ユニット毎に献立担当職員が1週間分ずつの献立を作成し、2日に1回の買い出しを行っている。調理担当のパート職員が中心になって調理をしている。利用者の希望を聴きながら、季節に合わせたメニューを工夫している。利用者は、下膳、食器の洗いや拭き方、テーブル拭きなど後片付けを手伝っており、キッチンに入り下準備をしてくれる人もいる。刺身など生ものが好きな人が多いが、ホームでは生ものは調理をせず、スーパーで購入している。大部分の人が介助なしで食事ができ、職員も一緒に和気あいあいとして食事を楽しんでいる。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態に応じ、食事量、水分量を把握し、メニューに栄養の偏りのないようバランスのとれた食事を提供出来る様に努めている。老健の管理栄養士に献立を出し、栄養のバランスを確認して頂いている。また毎月測定した体重を報告している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の有する能力を生かしながら、毎食後、口腔ケアを行っている。夕食後に義歯洗浄を行っている。老健の歯科衛生士に随時相談をしたり、週一回松原苑に協力歯科医が来るので、必要に応じ相談・治療をしてもらう体制となっている。			

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、排泄パターンを把握した上で、尿意便意曖昧な方に対しては声掛け、トイレで排泄する支援をしている。便座に座ることで、排泄するという意識付けをなくさないような支援を心がけている。利用者の状態に応じ、何がベストかを常時考えながらケアに当たっている。	全員がトイレで排泄することができ、半数以上の人が布パンツを使用している。尿便意がはっきりしなくなってきた人に便座での排泄習慣をなくさないよう支援している。リハパンにパットの人の中には、おむつが必要になりつつある人もおり、現状維持に向け支援に力を入れている。夜間は、ポータブル利用の1人以外の人は、自分でトイレに立っており、見守り中心の支援となっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の牛乳の提供、食物繊維の多い食材を取り入れた献立の工夫をし、体操や散歩等、体を動かす時間を設けている。便秘症気味の方には、日頃からの運動やマッサージや市販の飲料品(センナ茶)で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴剤を入れリラックス出来る様にしている。乾燥肌予防の為に浴用化粧料を入れている。本人が拒否したときは無理せず翌日にまわす。家庭浴槽が困難な方は特浴槽の準備もしている。	入浴は、一日2、3人で週2回を基本に、午前、午後どちらでも可とし、夜の入浴を希望する人にも対応している。浴槽への出入りの介助、背中洗いや手の届かないところを手伝うほかは、扉を閉めて待機し、ゆっくりと入ってもらっている。入浴剤と入浴化粧料を使い分けて、乾燥肌予防やリラックス効果のある入浴になるように対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	畳やソファ等、いつでも自由にくつろげるスペースを設けている。個々の体力を考慮し日中昼寝を促している。気温については各部屋にエアコンを設置しており、その人の体質(寒がり・暑がり)に合わせている。掛け物調整や湯たんぽ、電気毛布等の活用もしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後の処方薬の確認、申し送りにて職員間で共有し、把握に努めている。特に、新たな処方があった場合は注意している。また、情報をまとめたファイルを活用しいつでも閲覧出来る様にしている。内服薬が多い利用者は薬局にて一包化の協力を得ている。訪問看護とも健康管理記録表を活用し共有している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来る事、得意な事を理解し、炊事、洗濯物たたみ、裁縫、畑仕事、習字、生け花、コロナウイルス流行前は買い物に職員と一緒に掛かけ、欲しいものがあれば購入するといった支援をしている。特に入居者はドライブが好きで、季節感を持って貰う為に頻回に出かけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルスの流行前は頻回に買い物やドライブに出かけていた。季節を感じて頂くため、年間を通し、入居者・職員が外出・外食する企画も設けていた。入居者から希望があった時は可能な限り対応し、家族と一緒に掛かける機会を大事にしていた。盆・正月に外泊する事もあった。現在は感染予防の為に外部との関りは減っているが、その分、ドライブ中心に積極的に出かけている。、面会制限はしているが、利用者の生活と切り離せない関係性の人は面会を許可している。遠方の家族はガラス越しに面会することもある。	コロナ禍の中、外出の機会が減っているが、利用者からは、ドライブの希望が多く、週1回、ユニット毎に全員で周辺のドライブに出掛けている。普段の散歩は、施設の周辺を散策しているが、ちょっと足を延ばして国道端の大型店を覗くこともある。ユニット同士の行き来も自由に行っており、馴染みの利用者同士の会話を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の能力に応じ、管理方法を変えている。施設管理の小遣いの他に少額を自己管理してもらっている利用者もいる。コロナウイルスの流行前は欲しいものがあれば、買い物に同行し購入をしている。現在は欲しい物を傾聴して、職員が購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人と家族の絆を大切にしながら、情報を得ることにより、本人が過ごしやすい生活を送れるよう働きかけている。本人から要求あった際は電話を取り次ぎ、いつでもお話できるように支援している。こちらから暑中見舞いや年賀状を出したり、家族から手紙を頂く事もある。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム金山(南棟)

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホーム内には季節に応じた花や書いて頂いた書道、写真を飾っている。七夕やお雛様等の時節に合った物を飾ったりもする。トイレには清潔感や安心感を引き出す芳香剤を使用。生活感や季節感を取り入れ居心地の良い環境に配慮している。	南北のユニットで玄関が分かれているが、通路で繋がっており、合同行事等では南棟のホールを利用している。左右対称の構造になっており、ホールは居間、食堂、キッチンがワンフロアになっており、丸テーブルの食卓、テレビを囲むソファが置かれている。畳コーナーもある。予備の居室をスタッフの休養室にしている。玄関脇のテラスには長椅子が置かれ、天気の良い日は日光浴を楽しむことができる。季節にあった花、写真、利用者の作品等を飾り、ゆったりとくつろげる環境づくりを行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	サンルームや廊下にイスを置いたり庭にベンチを置き、思い思いに過ごせるような居場所を確保している。また、就寝時間は特に決めておらず、ゆっくりテレビや新聞を見て過ごす利用者もいる。その際には希望によりおかしや飲み物を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家で使用されていた馴染みの家具を持って来て頂き、出来るだけ自分の部屋に近づけることで、本人が安心して生活できるようにしている。趣味で作成した作品や家族との写真、賞状等を居室に飾っている	居室には、ベッド、エアコン、洗面台などが備え付けられ、家族と相談しながら、整理ダンス等、使い慣れた家具類を持ち込み、花や家族写真を飾り、自分好みに落ち着ける部屋づくりを行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室、トイレ等のプレートを目線に整備し、安全に配慮しながら出来る事を考慮している。不備があればすぐ点検、整備を行っている。ADLにより福祉用具も随時、準備出来る体制としている。		